

## 前回までのあらすじ

オオミヤ・シテイに現れた巨大な機獣——コードネーム〈破壊<sup>ルイン</sup>〉への反抗作戦が開始された。

ロゼット・コダールが発案した〈BO作戦〉。それは対大型〈カタストロ〉の出現に備えて用意されていたMBデバイスを用いた、一点突破を目的とした作戦案だった。

オオミヤ・シテイ各地で奮戦する〈機獣少女〉達。

その抵抗に対し、〈ハメツノマジユウ〉——〈ルイン〉が眠っていた地下施設に身を潜めていたサクヤヒメは、新たな戦力を呼び出し、戦場に送り出した。

一方、エイミス教の教会に身を寄せていたツバキ達は、〈BO作戦〉に参加するためオオミヤ・シテイに駆け付けるが、街に突入して早々にサクヤヒメが呼び出した戦力であるテイラノサウルス型の巨大な機獣と遭遇してしまう。五人がかりでも歯が立たない相手に、ツバキは自分達が使っているのは、機獣の力の一端でしかない事を痛感する。

そんな絶望的な状況下で、アヤカ・シユバイツァーはツバキに問うた——王子様を信じているか、と。

直後、戦場に現れたのは機獣と思しき黒い巨大な狼<sup>オオカミ</sup>と、消息不明となっていたカナコ・T・シングウジだった。

※登場人物紹介は[こちら](#)

ゾイカルやみひめ -結-

ゼヘナ暦二〇一六年十月二十七日。午前十時四十五分。

〈B〇作戦〉発動中のオオミヤ・シテイに突入したツバキを含む五人の〈機獣少女〉達は、作戦目標とは別の、情報にない巨大な機獣と遭遇・交戦状態に入っていた。五人がかりでも歯が立たず、自分達が使っているのは機獣の力の一端に過ぎないのだと思いきらされる。そんな彼女等の前に、黒いオオカミ型の機獣と、奇妙な面バイザーを着けた少女が現れた。

「ああっ、あんた……!?!」

〈機獣少女〉の一人であるキリエ・ソウマが、面バイザーを着けた少女の姿を認めるなり、素っ頓狂とんきょうな声を上げた。気持ちはツバキも判る。相手がよく知る、消息不明となっていた人物なのだから。

「————」

「カナコさん……」

黙して語らない少女——カナコ・T・シングウジの名を呼ぶツバキ。

長い黒髪は特徴的な姫カット。白い上衣うわぎと黒い袴はかまのMBジャケット。右手には得物えものであるカタナ型MBデバイス〈スサノオ〉。普段と変わらぬ姿の中、見慣れぬ面バイザーの奥で、彼女はどんな表情をしているのだろうか。

「……っ」

何か言おうと僅わずかに唇くちびるを開き、しかし言葉を発する事なく、カナコはティラノ型の機獣に向かっていった。

「ちよ、なんなのよ、あいつ！ なんで〈戦姫〉いくさひめが此処ここにいるの!?! ていうか、今まで何処どこに行つたのよ……!?!」

「まあまあ。落ち着きなよ、きりりん。どうどう」

有ただめる気があるのか今ひとつ判らないアヤカ・シユバイツアーに、キリエが半なかば八つ当たりのように嘔みついているのを余所よそに、ツバキはカナコの背中を目で追っていた。その先ではオオカミ型の機獣がティラノ型の機獣と戦っている。カナコはそこに割り込むつもりなのだろう。

「——援護えんごしないでいいの?」

黒いベリーショートの〈機獣少女〉——リツ・ミナトが、ツバキと同じ方向を向いたまま言った。

「あなたのお姉さんみたいな人なんでしょう?」

「ミナトさん……」

「私とモカは借りもあるし、あれを倒さないと先に進めないしね」

「私もシングウジさんに恩返しがしたいです!」

レースのリボンが似合う焦げ茶色のショートヘアをした、ツバキとほぼ同い年の《機獣少女》であるモカ・カワイが、鼻息荒く言った。自分を奮い立たせる意味もあるのだろう。《ブレケース》が最初に現れた時、救援に駆け付けたツバキとカナコが、リツとモカの窮地を救った事がある。二人が《ヒナミ総力戦》に参加したのも、先の出来事があったかららしい。

「カワイさんも……」

「ずっとお礼を言いたかったんです。あの時、お二人に助けてもらって、そのおかげでリツ先輩とも仲良くなれて。なのに、なかなか言い出せなくて……」

《ヒナミ総力戦》の前後は、ゆつくりと話す機会がなく、エイミス教の施設にいた頃は、今更な気がして言いにくかったのだろう。

「こんな時だし、今更ですけど——ありがとうございました！ お二人は私の憧れです！」

「モカがこつ恥ずかしい事を言ってるけど、私もそんな感じよ」

照れくさそうにはにかむモカとは対照的に、リツは相変わらずクールだが、少しだけ優しい笑みを浮かべている。

『借り』や『恩返し』はすでに充分果たせていると思うし、カナコは先の作戦中に無断で戦場を去ったのだから、不審に思ってもおかしくはないのだが、二人にそういった様子は見られない。

「……………」

そんな大した事をしたつもりはない。だが、ここで謙遜するのも空気が読めていない気がする。

「どういたしました……で、いいんでしょうか」

自信はなかったが、二人の反応を見るに及第点ではあったようだ。

カナコが、なぜ姿を消したのか。ティラノ型と敵対している黒いオオカミ型の機獣とは、どういう関係があるのか。

そもそも今の彼女は、ツバキの知るカナコ・T・シングウジなのか……。

(判らない……けど——)

当面の敵をティラノ型とすれば、この場の利害は一致する。

「方針は決まったかな？」

「はい。カナコさんとオオカミ型の機獣を援護しましょう」

キリエをイジっていたアヤカが、短めのポニーテールを揺らしながら首を傾けると、ツバキははっきりとそう答えた。

「そうね。この場は彼女等に任せて、私達だけで先に進むのも選択肢としてはあると思うけど、後顧の憂いは断つておくべきだわ」

アヤカは両手持ちの回転式多銃身機関銃を構え、不敵な笑みを浮かべた。戦闘狂という訳ではないが、彼女は戦いそのものを純粋に楽しんでいる節がある。それが今は心強い。

「待ちなさいよ。あの黒い奴——機獣？ あれは敵じゃないって言えるの？」

キリエがオオカミ型の機獣を指して言った。

「でも、赤い方と戦ってますし……」

「敵の敵が味方とは限らないでしょ！」

「ひいっ」

「——ちょっと、モカをいじめないでくれます……。バイセン？」

おずおずと発言したモカにキリエが怒鳴ると、リツは表情を消して平淡な口調で二人に割り込む。整った顔立ちのため、無表情になると妙に迫力が増す。

「八つ当たりなんて見苦しいですよ。怖いなら其処で見ればいいんじゃないですか？」

「そ、そんな事言っていないでしょう!? なんかに私に対する当たり、キツくない……!?」

慇懃無礼なリツの態度に、やや涙目で対抗するキリエ。学年で言えばキリエの方が一つ上のはずだが、明らかに優勢なのはリツだった。

「リツ先輩、もうそのくらいで……」

「………………。モカがいいなら別に」

おろおろする後輩の姿を見てクールダウンしたのか、リツは表情を戻した。クールな態度なため判りづらいが、モカの事を本当に大事に思っているのだろう。やはりリツはカナコに似ていると、ツバキは思う。

「——あのオオカミ型の機獣は味方よ。だから心配要らないわ」

明言するアヤカに、他の四人の視線が集中する。

「そういえば、先ほど王子様がどうか……アヤカさんはあの機獣が来るのを知っていたんですか？」

「いいえ。私も気付いたのは、さっきよ」

それはつまり、接近するまでは知らなかったという事か。

「どうして、そう言いきれるの？」

「ごめんね、りっちゃん。それは状況が落ち着いたらでいい？」

「今更だけど、あんた何処の〈機獣少女〉なの？ 顔も名前も見ただ事ないんだけど」

「それも状況が落ち着いたらね。今度は二人つきりで、じっくりお話ししましょう、きり

りん♪」

アヤカはリツとキリエの疑問には答えず、つんと指で脇腹を突き「ひゃん!？」と悲鳴を上げるキリエを見て笑った。その様子を見てみると、彼女に対する疑問などどうでもよく思えてくる。そもそも、疑問はあれど疑惑がある訳ではないのだ。

「では、行きましょう——カナコさんと黒いオオカミ型を援護します」

ツバキの言葉に、三人が頷き、キリエも仕方なくといった様子でそれに倣った。

情報にない未知の機獣は巨大で、全高約十メートル、全長は約三十メートルほどだろうか。巨大な頭部を持ち、前傾姿勢で長い尾を地面と水平に伸ばす姿は、恐竜に詳しくないカナコでも知っているティラノサウルスに酷似している。地球ではすでに絶滅しているが、この惑星ゼヘナでは過去に兵器として君臨していたらしい。

「……………」

不思議な感覚だ。今のカナコには生まれ育った十二年間の地球での記憶と、五年ほどゼヘナで過ごした記憶が、同時に存在している。幼い頃に外国で暮らしていた——というのとは訳が違う。国レベルではなく惑星が違うのだから。

とはいえ、目の前にいるティラノ型が恐竜でも機獣でもカナコのやる事に変更はない。彼女が背中に乗ってきたオオカミ型は、速さを以てティラノ型を翻弄しているが、子供と大人ほどの体格差があるため、攻撃が決定打とならずにいる。まるで野生の肉食動物が一匹で像に挑んでいるようだ。

「——ッ!」

ティラノ型に向かいながら、〈スサノオ〉を鞘に納刀するように構え、無数のカタナをイメージする。装飾性のない、実用性一点張りの凶器。機力によって編まれ、周囲に具現化したそれらに方向性を与え——撃ち出す。

ティラノ型に向かい飛翔するカタナの群れ。通常であれば多くても七本ほどだが、今は三十本もの数が投擲されている。気付いたオオカミ型が離脱すると、それらはティラノ型に次々と突き刺さり——

「——滅せよ」

発動 言語によって機力が威力に転化する。すなわち、機力で編まれたカタナが、破壊のためのエネルギーに変わる。青白い閃光を發し、ティラノ型の機体を包み込んでいく。熱と衝撃、光と音を撒き散らしながら。

——グウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!

だが、まだ終わりではない。咆哮を上げ、爆炎を裂き、傷だらけのティラノ型は姿を見せ、健在ぶりをアピールしている。

「王様だものね……ッ」

あれで倒せるとはカナコも思っていない。再び駆け出し、巨大な口を開き突進してくる暴君竜の王に真正面から応じる。姿勢を下げ加速し、〈スサノオ〉を抜刀、その勢いのまま振り抜く。ティラノ型の口腔部から突出した掘削機と、カナコのMBデバイスが衝突する。両者の動きが停止し、直後に衝撃波が周囲に奔り、足場が円形の盆地状に陥没した。恐るべきは、自分の数百倍ではきかない質量を相手に、拮抗するだけの出力を一人の少女が出している事だろう。

「……っく」

だがそれも長くは続かない。やはり圧倒的な質量の差は如何ともし難く、カナコの小さな身体は少しずつ押されていく。彼女の得物と回転する凶器が火花を散らせ、嫌な音を立てる。

「……っ?!」

突如、ティラノ型の両側面を覆っていた装甲板が大きく開き、後方に置まれていたそれが、前方に向かって閉じていく。カナコを左右から挟み込むように迫るそれは装甲板ではなく、獲物を逃がさず捕えるための顎だったのだ。閉じきるまで三秒とかからない。

MBジャケットの防護機能で防ぎまされる保証はない。

ならばと、一時離脱を考えた刹那――

「――はあああああああああああああああああああああああああああああッ!!」

「――でええええええええええええええええええええええええええええいッ!!」

カナコの左右から現れた二人の〈機獣少女〉が、閉じかけたティラノ型の顎を一枚ずつ受け止め、僅かだが押し返した。

右手には、馬上槍を両手持ちし、正面に突き進もうとする同い年くらいのドレスアマ―。左手には、槌矛を両手で振り下ろし、そのまま振り切ろうとする小学生くらいのチャイナ服。

キリエ・ソウマとモカ・カワイだ。

「――っふー!」

「――はあッ!」

続けて現れた二人は、頭上からティラノ型の頭部に着地すると、それぞれの得物を突き

立て、ピンポイントで目を破壊した。機獣と言えど目は弱。点だったらしく、ティラノ型は絶叫すると、左右の顎を元の位置に戻したたらを踏んだ。

（リツ・ミナト——）

モカと同じ意匠のチャイナ服を着た、高校生くらいの槍使いの〈機獣少女〉。そして、もう一人。

（ツバキ……）

赤い和装に、弓のような形状のMBデバイス。セミロングの黒髪をサイドポニーにした、小学生五年生の小柄な少女。

——ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンッ！

咆哮を上げ、狼を彷彿とさせるシルエットが舞い戻った。ツバキとリツは、すでに退避している。

「下がって」

その巨大なスケールに慣れず棒立ちになっていたキリエとモカに呼びかけ、はっと我に返る様子を確認し、カナコは戦う二体の機獣から距離を取る。

側面から飛びつき、ティラノ型の背中 of 装甲に牙を立てるオオカミ型。牙を通して電流が流し込まれ、ティラノ型が悶絶すると、オオカミ型はその装甲を強引に剥ぎ取った。宙に舞う赤い装甲が太陽の光を反射し、血が噴き出したように錯覚する。

更に、オオカミ型の背中に乗っていたらしい〈機獣少女〉が、剥き出しになったティラノ型の背中に銃弾を連射するのが見えた。修道女のようなMBジャケットを纏い、手にしているのは回転式多銃身機関銃。

「……………」

見覚えがある。たしか、ヒナミ・シテイに向かっていたトレーラーからアサトを連れ出した際、同乗していた少女だ。彼の事を『兄様』と呼んでいたので、印象に残っていた。  
（〈機獣少女〉だったの……）

今思えば、あの状況でトレーラーの乗員が増えていたのは妙だ。ロゼット達は封印施設の調査に向かった帰りで、道中に保護でもしたのだろうか。だとしても、アサトを『兄様』と呼んでいた疑問は残るが。

（私の兄さんなのに——）

モヤモヤした気持ちを振り払うように駆け出す。キリエが何か叫んでいたようだが、どうでもいい。ティラノ型はだいぶ弱っている。畳みかけるなら今だろう。



「……！」

だが、彼女の行動はすぐに引き止められた。オオカミ型の機獣がカナコを庇うように眼前に着地し、進路を遮ったのだ。

「……兄さん？」

オオカミ型の頭部を見上げ、その視線がティラノ型に向いたままである事を不満に思いつつ、カナコは臨戦態勢を維持する。全身の装甲をズタズタにされ満身創痍ではあるが、暴君竜の王は膝を突かない。自己修復機能があるらしく、破壊されたはずの赤い双眸は元に戻っており、劣勢であるにも関わらず闘志を感じさせる。

「……まだやる気なの——」

「どうでしょう……」

カナコとオオカミ型の元に合流したリツとツバキが、視線はティラノ型に向けたまま言った。当然だが、二人とも疲弊している。背後からはキリエとモカが追いついてくる気配がある。

——グルルルルルルルルルルルルルルルル……。

ティラノ型が不意に低い唸り声を上げた。するとその全身が黒い『淀み』に包まれ、沈むように消えていく。

帰っていく——そんな風にカナコには感じられた。

——ナイスファイト。でもね、負けるの嫌いなんだよね、ボク……。

ティラノ型の全身が見えなくなる直前、『声』が聞こえた。肉声ではないだろう。念話のように、直接心に届いたような印象だった。

「……な、なんですか今の声!？」

「モカにも聞こえたのなら、私の幻聴じゃなさそうね」

モカとリツだけでなく、ツバキとキリエも声を聞いたらしく、戸惑いの表情を浮かべている。

「——今の機獣の搭乗者だと思っわ。なんていうか、かなり『困ったちゃん』っぽい感じだったわね」

全員視線が降りてきた修道女風の『機獣少女』に集中する。オオカミ型の背中に乗っていたらしい。あんな怪獣同然の相手と戦った直後にも関わらず、飄々とした笑みを

浮かべている。見た感じ高校生にはなっていないと思える年頃だが、妙に余裕があるというか、達観している印象を受ける。

「確かに、機獣であれば搭乗者がいたと考えるべきかもしれませんが……」  
声の伝達手段や、不可解な撤退の仕方、敵対してきた理由など、何も判らず仕舞いなため、ツバキは納得しきれないらしく、それはこの場の全員が同じ気持ちだろう。

「え？　じゃあ、この機獣にも誰か乗ってるの？」

ふと気付いたようにキリエが、カナコの傍かたわらに立つオオカミ型の機獣を見上げた。他の者も同様だ。消えたティラノ型と比べればかなり小さいが、それでも全高約八メートルの四足獣なのだから、人間からすれば充分巨大と言える。

すると――

「――え……っ」

オオカミ型が『伏せ』の姿勢を取り、操縦席コクピットがある頭部が開き、搭乗者が降り立つ。パイロットスーツなどなかったため、完全なる普段着である。だが、ツバキが彼を見て驚いた理由は別だろう。カナコを除けば、ツバキはこの場で唯一、彼とともに面識がある人間だから。

「どうして橘たちばなさんが……っ」

そう。カナコと共に現れた黒いオオカミ型の機獣――その操縦席コクピットから姿を見せたのは、彼女の兄である橘アサトだった。

カナコと共に消息不明となっていたアサトが今、ツバキの目の前にいる。以前と変わった様子はない。顔色が優れない気がするが、彼は基本的に物憂ものうつげで、普段からどこか疲れた印象があるので、そのせいかもしれない。

「た、橘さん……っ？」

アサトと目が合う。数日ぶりだからか、妙に緊張する。

「ふえっ……っ？」

彼が数歩の距離を詰め、片膝を突き、ツバキと視線の高さを合わせた。今の戦闘で気分が高揚し、この再会に気持ちを抑えきれなくなってしまったのだろうか。それはつまり、アサトがツバキに対し好意を抱いていたという事。

だとしても、こんな公衆の面前で――

「……………えっ？」

あわや唇が触れるかと思った直後、アサトの顔はツバキの横を通過し、彼に押し倒され

るような格好となった。MBジャケットを展開している今、〈機獣少女〉は熊<sup>くま</sup>とでも取っ組み合いが出来るのだが、動転して逆に力が抜けてしまったのだ。

「――」

ざわつく一同の視線ももちろん痛かったが、アサトに押し倒されている状態を見下ろすカナコの完全なる『無』の表情の方が、比べるまでもなく怖かった。

〈BO作戦〉発動から一時間五十五分経過。

『輪<sup>リング</sup>』の衛星軌道到達予測時間まで、残り約一時間。

第四十一話

集結

〈BO作戦〉発動の一週間前。

名も知らぬ街で一夜を明かした橘アサトとカナコ・T・シングウジ——今は橘カナコと呼ぶべきかもしれない——二人の兄妹は、宿として利用したラブホテルのすぐ外で出会ったメイド服の幼女に連れられ、地下施設へと案内されていた。街の端に隠されていた井戸のような入口に入れと言われた時には不安だらけだったが、梯子を数メートルも降りると昇降機があり、今進んでいる通路も照明が生きている。

「……………」

少し先を歩き、二人を先導するメイド服の幼女の姿を見つめる。アサトは、その鮮烈な紅い色の髪に見覚えがあった。封印施設の隠し部屋でアヤカ・シユバイツアーを発見する直前に現れ彼女と入れ替わるように、文字通り姿を消したアサトと同じ年くらいの少女。彼女もまた紅い髪を持ち、瞳の色も紅かった。人形のように表情がなく、静謐な雰囲気も似ていたように思う。

「……兄さんは小さい子が好きなんですか？」

すぐ隣からカナコの不満そうな声が出た。アサトの腕を取り、密着しているため、やや歩きづらい。見知らぬ地下で怖いからだそうだが、嘘だろう。

「そういえば、流遠やみひめやベアトリーチェにも懐かれていましたね。ツバキも兄さんに好意的みたいでしたし……」

此方を見上げる妹の疑惑の視線が痛い。アサトの腕を抱く力を強め、更に胸を押しつけてくる。細身で見たい目には気がつきづらいが、意外と大きいため、その存在感を無視するのは不可能だ。『大きい方がいいでしょう？』というアピールのつもりか。

「申し訳ありません。欲情させてしまいましたでしょうか」

先導していた幼女が立ち止まって振り返り、無表情にとんでもない事を宣った。

十歳に満たないであろう幼い容姿にメイド服。自然に出るとは思えない鮮やかな紅い色の髪。極めつけは、目元を完全に覆う紅い眼鏡である。存在に現実感がなさすぎる。ロボットだと言われた方がまだ信じられる。

幼女は自らを『紅桜』と名乗り、二人を迎えに来たと言っていた。他に行く当てもなかったというもあるが、アサトはなぜか彼女に従うべきだと感じ、今に至っていた。

「……あなた、意味を分かって言っているの？」

「私の女性としての魅力が、彼を性的に興奮させた可能性を考慮しました。一般的に、男性が第二次性徴前後の女兒に発情する症例は稀だとされていますが、様々な性的嗜好が存在する以上、彼が違つとは言いきれません」

訝しげなカナコの問いに、紅桜は淡々と答えた。幼女の口から出たとは思えない内容

に、アサトは言葉を失う。

「そうなんですか、兄さん？ 女子高生になってしまったら、もう『女』じゃないんですか……？」

紅桜べにおと同じか、それ以上に無表情となったカナコが、感情の乗らない口調で言った。恐らく、最初はありえないと思っていたはずだが、今はその限りではなくなったのだろう。

「俺はロリコンじゃない」

嘆息たんそくし、アサトはそう明言した。現金なのかアサトに対する信頼が絶大なのか、カナコはぱっと表情を輝かせ、紅桜は「そうですか」と無表情に納得していた。

無言で歩みを再開する。疑問はいくらでもあるのだが、不思議と紅桜を問い質たす気にもなれず、カナコは彼女に感心がないように見える。アサトの腕を取って歩いていただけで、散歩中の犬のようにご満悦というか、彼以外の事はどうでもよくなっているようにすら感じられる。

「――」

「どうした？」

足は止めず、先導する紅桜が振り返って無言で見つめてくるので、何事か尋ねる。

「私も腕を組んでみても構いませんか？」

「――絶対に駄目よ」

即答である。もちろん今のはカナコだ。

「そうですか」

あつさりと引き下がる紅桜。特に落胆した様子は見られない。

カナコの満足そうな様子を見て興味が湧わいたのだろうか。表情からも口調からも、まるでこの幼女は読めない。

「ちよつと大人げないか？」

「兄さんは優しいですね。でも、私以外の女が兄さんに密着するだなんて、そんなの……

……許せませんよね？」

表情はにこやかなまま、カナコの瞳から光が消える。完全に目が笑っていない。

「……………」

余計な事は言うまい――そう決めてアサトは紅桜の後を追った。

数分も進むと、やがて格納庫のような空間に到着した。恐らく機獣のためのものだろう。

明らかに一般車両や重機用ではない。駐機スペースに固定器具、壁や天井からはクレーンやアームが伸び、奥には資材置き場らしき倉庫も見られる。

「此方こちらです」

先導する紅桜に言われるがまま進むと、其処には一体の機獣が鎮座していた。全高約人メートルの黒いオオカミ型。〈ステインガー〉とその幼体を除けば、機獣を見るのは当然初めてのはずだが、アサトはその機獣を知っている気がした。

「……………」

引き寄せられるようにオオカミ型の機獣に近づき、手を伸ばす。人間からすれば巨大に過ぎる機体、その前脚の一部に触れる。

金属なので当然、冷たい。

だが、不思議と温もりを感じる。生きているのだと判る。

そして――

「兄さん……?」

アサトのただならぬ様子に、腕を離していたカナコが呼びかける。

「……紅桜、説明してくれるんだろ」

だがアサトに妹の声は届かなかったのか、その言葉は紅い髪の少女へと向けられていた。

「はい。この機体の名前は〈ヤミヒメ〉。そして――」

紅桜は淡々と続ける。

「現在は、あなたの知る『流遠やみひめ』でもありません」

彼女の言葉を理解出来ない様子のカナコを余所に、アサトは無言で続きを促した。



暖かい。

エアコンや電熱器とは違う、優しく包み込むような温もり。熱を感じるのは主に下半身なのだが、かといって上半身は寒い訳でもなく、不思議と全身が暖まる。

(炬燵みたいだなあ……)

一度入ってしまったら、もう抜け出す事は不可能な魔窟。ずっと留まっていたくなる魔力を秘めた、人間を墮落させかねない禁断の宝具。

(アサトの家にもあるのかな、炬燵。ベアトリーチェは丸くなったりするのか。膝の上で寝たりしたら可愛いだろうなあ……)

橘 アサトが飼っている、茶色の毛並みの日本猫。見た目的にも性格的にも、炬燵が

似合いそうだ。次に彼に会ったら聞いてみよう。

「――あれ? 私、どうしたんだっけ……?」

〈カタストロ〉から友人のクラウ・P・ブランを助け、使命を果たしたツバキ・タカチホ

は故郷の惑星ゼヘナに帰還した。それから地球で世界改変が起こり、ゼヘナに転移し、また《機獣少女》として戦った。大きな作戦があつて、人間の姿となった古代の機獣であるサクヤヒメと戦い、それから――

「……うにゅ？」

微睡ましろみの底に沈んでいた意識がゆっくりと浮上し、流遠るとおやみひめは目を覚ました。

「――ふむ。ようやく目覚めたか、この寝坊助め」

眼前には二十歳手前くらいの娘がいて、呆れた様子でやみひめを見ている。聞いた事がある気がするが、『ネボスケ』というのは雰囲気からして悪口だろうか。

「……………んう？」

見覚えがある。

黒い和服に身を包んだ美しい容姿。艶つややかな長い黒髪をポニーテールにしており、頭頂部には狼おおかみのような耳が生えている。橙だいだい色の瞳はツリ目がちだが、攻撃的な印象はなく、凜とした雰囲気ただよを漂わせている。それは炬燵こたつに入って蜜柑みかんを剥むいても変わらな  
い。

炬燵に蜜柑だけではない。床には畳たたみ。仕切りは障子しょうじ。照明は行灯あんどん。今時、ここまで『和』で統一された部屋も、そうないだろう。

此処ここには来た事がある。目の前の娘も知っている。

ツバキの相棒パートナーのMBデバイス〈カグツチ〉であり、本来は〈ヤミヒメ〉という機獣で――平行世界における流遠るとおやみひめの別の可能性。

そして此処は〈想刻の間せうこく〉と呼ばれる仮想空間であり、人間の姿となった機獣と対話が可能なる場所。

「また会ったな――別の私よ」

綺麗に皮を剥いた蜜柑を半分に割り、片方をやみひめに差し出しながら、機獣の化身である娘は言った。

反射的に受け取り、一房いちぼうちぎって口に運はこぶ。甘い。

段々と記憶が明瞭になってくる。ヘナミ総力戦でツバキと共にサクヤヒメと戦い、ロゼット・コダールの秘書であり古代種だというアニスが駆け付けた後、やみひめは唐突な不快感に襲われ意識を失った。

「うん。もう会えないと思つてた」

地球での戦いで死にかけたやみひめは、記憶を取り戻した〈カグツチ〉――同一存在である〈ヤミヒメ〉との融合を果たした。その際、〈ヤミヒメ〉の記憶や人格は、やみひめの中に溶けて消えたはずだった。現在のツバキのMBデバイスとしての〈カグツチ〉は、〈ヤ



ミヒメとしての記憶を取り戻す以前の人格をベースに再起動させた、言わば疑似人格なのだ。

それが、なぜ——

「アヤカ・シュバイツァーの力だ」

この特異な空間のためか、ヤミヒメはやみひめの疑問を読み取り、回答を口にした。

「黒髪で短めのポニテの人？」

意識を失う直前、やみひめを背中に庇うように現れた、修道女のような格好をした後ろ姿を見た。それがやみひめの中に溶けた〈ヤミヒメ〉の記憶と合致する。自分が知らないはずの事や人物を知っているというのは、不思議というかなんなら気味が悪くすらある。

「そうだ。彼女は特殊でな——」

ヤミヒメが言うには、アヤカが起動した事でやみひめが設定した〈カグツチ〉の疑似人格が消失し、〈ヤミヒメ〉本来の人格を再生してしまっただけらしい。その結果、この惑星ゼーナに同一存在が同時に存在するという矛盾が発生した。地球でそれが起きなかったのは、記憶を失っていたために、〈カグツチ〉が自分を〈ヤミヒメ〉だと認識していなかったためだそうだ。

「……えっと。我思う、故に我あり——みたいな事……？」

「さあな。言っておいてなんだが、小難しい事は私にも判らぬ」

認識論なのか量子論なのか……ともかく、発生した矛盾を世界は許さない。間違いは是正され、不具合は取り除かれる。

「それで私は、この世界の異物として消されそうになったんだね」

「そういう事だ。それを防ぐため、咄嗟に私の本体に其方の精神を避難させた」

特殊な機獣だからこそ出来た事だが、それを誇る様子がないのは、他ならぬ『もう一人の自分』のためだからか。

「ありがとう、助けてくれて」

だがそれでも、感謝の言葉が口を衝いて出た。

「……ふん。礼など不要だ」

そっけない態度だが、照れ隠しなのがバレバレで可笑しくなる。同一存在とはいえ、彼女は平行世界における別の可能性——つまり『別人』なのだ。自分だからこそ思う事なのかもしれないが、少なくとも性格は似ていないと思う。

「けど、これからどうしよう。私、ずっとヤミヒメの中で過すの？」

〈ヤミヒメ〉の外に出れば、矛盾として排除されてしまう。かといって、ずっとこのままという訳にもいかない。

「なんだ、此処でまったりと過すのは不満か？ 餅もあるぞ？」

ヤミヒメが言うと、まるで最初からあったかのように焼いた餅が置かれていた。ご丁寧  
に、砂糖醬油が入った小皿まである。

「あ、きな粉がいいなあ——じゃなくって」

「ふん。冗談だ」

顔を見合わせ、同時に笑う。

どうしようもなく理解してしまう。

生まれた世界、種族、今日までの生き方がまるで違うはずなのに、どうしようもなく自  
分達は同じなのだ。

だからこそ、どうしようもなく、また別れの時が来たのだと。

「また会えてよかった」

「私もだ。あの後、ツバキのために私の疑似人格を〈カグツチ〉として再起動してくれた  
事、礼を言うぞ」

「……っ」

「ん？」

「あんなの、ただの私の自己満足で、本当はすごく無神経な事しちゃったんじゃないかっ  
て、思い出す度に考えてたから………ありがとう」

「なんだ。礼を言いたかったのは私だぞ？」

「そうだね」

「ふっ」

「っははは！」

可笑しいはずなのに、もうこんな風に笑い合う事はないのだと思うと、少し悲しい。

「迎えが来たようだ」

ひとしきり笑うと、ヤミヒメは背後に視線を向け、言った。やみひめが振り返ると部屋  
を仕切っていた障子が左右に開き、見知った少年の姿があった。

「アサト……っ！」

思わず立ち上がり、駆け寄って、彼の胸に飛び込む。勝手に身体が動いていた。なぜ彼  
が此処にいるのか、受け止めてくれるのか、そんな事は考えなかった。

橘アサトが来てくれた——流遠やみひめにとっては、それで充分なのだから。



寝起きの倦怠感に似た嫌な感覚。厳密には違うのだろうが、寝ていたようなものなのだから、表現としては間違っていないだろう。

「……………ん——」

瞼を開く。個室と呼ぶには狭い、戦闘機の操縦席を思わせる空間である。無論、アサトは戦闘機乗りでもなければ軍事愛好家でもないので、実際に座った事はないが。

「——通常空間への復帰を確認。精神への影響は見られません」

背後——複座の後部座席から、感情の起伏に乏しい声が聞こえた。彼の状態を監視していた紅桜だ。

「……せめて、もうちよつと可愛くモーニングコールしてくれないか？」

ただでさえ極度の低血圧なため、寝起きはつらい。少しでも癒しが欲しいと思うのは仕方がない。

「承りました。——おはようございます、ご主人様」

アサトのダメ出しを踏まえメイドらしい対応に切り替えるが、いかせん紅桜の棒読みは変わらなかった。

「風防窓、開きます」

蓋が開くように天井が持ち上がり、外の景色が広がる。格納庫なのは変わらないが、かなり視線が高い。

「——兄さん！ 大丈夫ですか!? 私的事、判ります……………!?!」

天井が開ききらないうちに、鬼気迫る様子のカナコが身を乗り出して問うてきた。かなり心配してくれていたのだろう、薄っすらと涙が浮かんでいる。

「大丈夫だよ。俺の可愛い妹だろ」

ほんぽんとカナコの頭に手を置き、アサトは冗談めかして言った。

「——!? おかしいわ、紅桜！ 正常な兄さんなら、『世界一可愛くて愛おしい最高の妹だ』って言うってくれるはずだもの……………!!」

「……………俺のキャラを捏造するな」

そこまでシスコンではない。

とはいえ、カナコが取り乱すのも無理はない。この『引き上げ』には、それなりの危険が伴っていたのだから。

紅桜が語った『流遠やみひめ』がどういう存在か。そして今、どういう状況なのか。カナコは半信半疑で、アサトもそれは同様だったが、どこか深いところで真実だと理解している感覚がある。この惑星ゼヘナには、やみひめと同一存在の機獣がいて、彼女の魂と呼

ぶべきものが今は其処そこにある。その魂を表面に引き上げるため、紅桜は現れたのだ。

「引き上げは成功したんですか？」

「……そのはずだ」

カナコの問いに明言出来ないのは、それが仮想空間での出来事だからだ。アサトは機獣の方の〈ヤミヒメ〉の操縦席から記憶装置内に接続し、精神のみを潜入させた。其処でやみひめを見つけ、飛び込んできた彼女を受け止めたまでは憶えているが、その後の記憶が曖昧あいまいだった。

そもそも、魂だけを引き上げても、器となる身体からだはどうするのか。

「——ん？」

操縦席のあらゆる画面モニターが暗転し、すぐに映像が回復すると、そこには見知った人物の姿が映っていた。ポニーテールにした長い黒髪。ツリ目がちだが攻撃的ではない。橙色の瞳。大胆に肩を露出した黒い和服のような衣装を纏い、頭頂部には狼おおかみのような獣耳ケモノミミを付けた、小学六年生の女の子。

流遠るしおやみひめだ。

『アサト！』

画面越しに、此方こちらに向かって元氣そうに手を振っている。背景は和室のような空間で、炬燵こたつらしきものが見える。

「やみ子……本当にこの中にいるんだな」

『そうみたい。私も実感はないんだけど』

「……………」

『カナコもいるんだね。じゃあ、ツバキやクラウも？』

横よこから覗き込んでいたカナコの姿に気付き、やみひめは言った。彼女は〈ヒナミ総力戦〉で意識を失った後の事は把握はあくしていないらしい。

「後で詳しい話をする。とりあえず、無事……って言い方いいのか？」

「うん。ありがとう、迎えに来てくれて……えへへ」

さすがに恥ずかしいのか、照れくさそうに笑って誤魔化ごまかすやみひめ。その姿に、アサトはなんとも言えない気持ちになる。

可愛い。愛おしい。大切。

どれも当てはまる気がするし、そのどれも微妙に違う感情な気もする。

「……………」

改めて思う。

橘たちばなアサトの、流遠るしおやみひめに対して抱えている感情とは、いったいなんなのだろう。

友愛なのか。性愛なのか。もっと別の何かなのか。

「——兄さん……っ！」

「おわっ?！」

『ふえ……っ?!!』

耐えかねたように声を荒げたカナコに、二人揃って驚く。その反応が気に食わなかったのか、更にカナコの機嫌は斜めになっていく。

「私はお腹が空きました。ああ、でもそっちの彼女は必要ありませんよね。では、何か食べに行きましよう兄さん——二人で！」

『え? 兄さんって……え?』

カナコが強引に腕を引き、アサトを操縦席から連れ出そうとする。やみひめは事情を知らないため画面内で困惑している。どうしたものかと考えていると、ずっと背後で無言なため、存在を忘れていた紅桜が言葉を発した。

「——重要なお知らせです」

「後にして。こっちも一大事だから」

「いや。カナコ、話を聞こう」

「兄さん……やっぱり小さい子の方が——」

「だから、違つと……」

『あれ? 他にも誰かいるの?』

「………続けても構いませんか?」

わちゃわちゃした状況の中、紅桜の声音は変わらず起伏がないのだが、心なしか怒っているように感じられた。カナコにもそれが伝わったのか、渋々といった様子でその場は引き下がった。

「ネットワーク上で急速に拡散されている動画がありました。配信者は〈L. C. ファクトリー〉のロゼット・コダールです」

それは〈BO作戦〉の詳細と、その発動理由を世界中に知らせるためのものだった。



「それで、こうして駆け付けてくれたんですね」

カナコから姿を消した後の概要を聞き、ツバキはそう言って納得した。ちなみにアサトの先の奇行——ツバキを押し倒した件については、オオカミ型の機獣の操縦による身体への負担が原因だった。つまり立っていられず、近くにいたツバキに縋った結果、受け止め

きれず押し倒されるかたちになってしまったのだ。

「……っ」

勘違いしてドキドキしてしまった自分が恥ずかしい。それはそうだ。ドラマじやあるまいし、付き合ってもいないのに、この状況でいきなりキスなどするはずがない。

「大丈夫ですか、兄さん？」

「……………死ぬ——」

心配そうに兄を介抱するカナコと、妹の膝枕で弱音を吐くアサト。事情を知らなければ情けない光景に映るだろうが、彼の発言は大袈裟でも軟弱でもない。すでに血を吐いているのだから。

恐らく、アサトが特別に虚弱という訳ではなく、機獣の操縦に地球人の肉体では耐えられないのだろう。意識した事はないが、ゼヘナの生物には金属細胞がある。それは地球人との混血が進んだ今のゼヘナ人も変わらない。その有無による差ではないだろうか。

( 橘さん…… )

改めて、自分達が違う惑星の人間なのだと認識する。

カナコもそうだ。

彼女は記憶を取り戻した。地球人であり、アサトの妹であるという記憶を。

(もし戦いが終わったら、カナコさんも一緒に地球に帰るのかな……)

以前、もし地球人だったとしても、カナコは今更帰る気はないと言っていた。だがこうして記憶が戻り、アサトとの関係も良好なら、彼と故郷に帰るのは当然と思える。ツバキ自身がそうだったのだから。

「——お待たせ。話はまとまったわ」

そんな事を思っていると、機獣の操縦席で紅い髪の少女——紅桜というらしい——と何やら相談をしていたアヤカが、地面に降りて言った。

(この機獣が〈カグツチ〉の本体で、本来の名前は〈ヤミヒメ〉……)

アヤカの言葉に耳を傾けつつ、〈ヤミヒメ〉の巨体を視界の端に入れる。現在この機獣には、流遠やみひめの精神——魂と呼ぶべきものが納められているらしい。

「——ツバピよん、聞いている？」

「あ、すみません……『ツバピよん』？」

キリエとリツに続いて、アヤカに渾名を付けられてしまったらしい。

「ツバキって兎っばいから。もうっ、お姉ちゃんの話はちゃんと聞かないとダメだぞ☆」

「……『お姉ちゃん』？」

判りやすく怒ったふりをするアヤカの言葉に、カナコが密かに反応していた。まるで『そ

これは私のポジションだ』と抗議しているようで、それが少し嬉しかった。

言葉を交わして実感したのは、カナコの本質は何も変わっていないという事。件の面<sup>バイザー</sup>で表情が見えづらいが、それは間違いない。ただ、周囲に壁を作っているような、やんわりと拒絶している雰囲気がある。キリエですら彼女に深入りしなかったのは、それを察しての事だろう。

ともあれ——〈ヤミヒメ〉から降りてこない紅桜を除くと、この場にいるのはアサトとカナコ、彼女に引き止められたツバキとアヤカ——以上の四人である。

あとの三人——キリエ・リツ・モカには先行してもらった。五分ほど前の事だ。

「じゃあ、もう一回言うよ？ ここからはあたしが〈ヤミヒメ〉に乗る。アサトはもう限界だ」

「……………すまん」

妹の膝枕<sup>ひざおむ</sup>で仰向けのまま、アサトがぼそりと呟いた。全身筋肉痛に近いらしく、微動だにしない。

「ツバピよんには、やみ子ちゃんの身体<sup>からだ</sup>の奪還をしてみよう」

「はい」

サクヤヒメに奪われた、魂のないやみひめの身体は、今は〈ルイン〉に取り込まれて動力源とされているらしい。それはサクヤヒメが健在である事と、〈ルイン〉の出現に彼女が関わっている事を意味する。

(本気で人間を滅ぼす気なのか…………)

人間を嫌う理由など、いくらでも思いつく。人間だからこそ、悪い部分を嫌というほど知っている。だが、人間そのものを滅ぼさねば気が済まないほどの恨みや憎しみがサクヤヒメにあるなら、その原因は何なのか。ツバキには見当もつかなかった。



オオミヤ・シテイの中心部から少し離れたビル街。

周辺の〈プレケース〉と〈ステインガー〉の幼体は粗方駆逐したが、そこへ新たな脅威が出現していた。巨大な頭部と長い尻尾<sup>しっぽ</sup>を地面と水平に保ち、二本の脚で屹立<sup>きつりつ</sup>する巨大な蜥蜴<sup>とかげ</sup>。恐らく機獣の一種だろう。全高は十メートルほどなので周囲のビルよりは低いが、全長はその三倍ほどあるため、人間からすれば威圧感<sup>きあつかん</sup>は半端ではない。

「——がつ！」

悲鳴が上がり、機獣に尻尾を叩きつけられた〈機獣少女〉がビルの壁面に激突した。そ

のまま地面に落ちて動かない仲間を護るように、二人の〈機獣少女〉が立ちほだかるが、彼女等もすでに満身創痍だ。

迫る機獣。

気圧されながら、それでも二人は退かない。

「——つくううう！」

大きく開かれた機獣の口が閉じる瞬間、その巨大な顎を受け止める者がいた。楕円形の大型盾を両腕に装備した、紅いロングヘアの〈機獣少女〉——〈竜帝〉ルイゼ・ルンシユテッドである。

「——はあああッ!!」

ルイゼの横を抜け、小柄な蒼いショートヘアの〈機獣少女〉がアッパーカットを繰り返す。〈獅子王〉アイナ・ボーグマンである。よく見れば素手ではなく、出刃包丁のような短剣が握られている。

破壊こそ出来なかったものの、やはり脳に相当する器官があるのか、顎に強烈な一撃を受けた機獣はよろめき、数歩後退した。

「もう充分だ。お前達は負傷者を連れて後退しろ」

アイナは機獣に注意を向けたまま、背後の〈機獣少女〉達に言った。

「でも——」

「言う通りにしましょう。早く手当てしないと、みんな助からない」

一人は躊躇していたが、片方が明確な意思表示をした事で同意し、倒れている仲間達に駆け寄った。

「賢明な判断です。アナタは良い指導者の資質をお持ちですわ」

「……いえ。私は仲間を見捨てたくないだけなんです」

庇ってくれたルイゼに礼を告げ、彼女もすぐに倒れている仲間達の救援に向かった。ロゼットが用意した強化システムである〈D・I・R・S〉も使い切った以上、彼女等はこの機獣の相手は荷が重い。言い方は酷だが、残っても無駄死にするだけだ。

「また二人きりになってしまいましたわね」

「そうだな」

アイナの隣に並び、ルイゼが正面を見据える。人間で言えば脳震盪に近い状態だったであろう機獣は、すでに回復していた。黒い機体に、骨を思わせる灰色の装甲を纏っており、全体的に生々しいというか、骨格が動いているようにも見える。

「この機獣、〈ステインガー〉や〈ルイン〉とは、かなり雰囲気が違うな」

「ええ。時代というか、世界観が違う印象ですわね」



〈ルイン〉と同じく、この機獣も地下から現れたらしい。他にも機獣が眠っているのか。あるいは、この街の地下は何処か妙な場所にでも繋がっていたりするのだろうか。

「なんであれ、ワタクシ達のやる事に変わりはありませんが」

「そういう事だ」

どちらからともなく握った拳が差し出され、それに無言で応える。こつんと合わさった拳が鐘となり――

――グウオオオオオオオオオツ!?

驚愕の声を上げ、機獣がつんのめり、鼻っ面を地面にめり込ませた。

その背後から現れたのは、馬上槍を携え、ドレスと甲冑を組み合わせたMBジャケツトを纏った〈機獣少女〉――キリエ・ソウマだ。

更に機獣の左右から迫る〈機獣少女〉が二人。どちらもチャイナ服と呼ばれる意匠のMBジャケツトを身に着け、年上の少女は長い槍を、年下の少女は鈍器である槌を繰り出す。

先の〈ヒナミ総力戦〉でも共に戦った、リツ・ミナトとモカ・カワイだ。

二人の攻撃は、機獣の脇腹から伸びた副腕のような装備に弾かれたが、すぐに体勢を立て直し、アイナとルイゼに合流した。

「お前達……」

「遅くなりました!」

開口一番、申し訳なきように言うモカ。リツは機獣に注意を向けたまま、同意を示すように無言で頷いた。

「いや、来てくれて助かる」

「ですわね」

ルイゼが小動物にそうするようにモカの頭を撫でた。

「えへへ……」

無邪気に喜ぶモカを見て、小柄なアイナは無言で『お前も撫でてやるから屈め』と視線を送るが、リツは全力で気付かないふりをしていた。

「ちよ、ちよつとあんた達! 私一人に任せ――にやああああああああ……っ!」

先の一撃が逆鱗に触れたのか、機獣の猛攻を一身に受けていたキリエが悲痛な叫びを上げていた。

〈B O 作戦〉発動から一時間が経過。

決戦の場と呼べるオオミヤ・シテイ中心街は混迷を極めていた。

「――バナラっ！」

「く……っ」

クラウ・P・ブランの呼びかけと視線の向きから、反射的にバナラ・イカルガは銃口を真横に向ける。敵との距離は一メートルを切っているが、武器が大型剣ならバナラの抜き撃ちの方が先に届く。そう判断したらしいポニーテールの『サムライ』は躊躇なく離脱し、銃の射線から逃れた。

視界の端ではクラウが戦っているが、バナラを気にしながらのため、満足に力を出しきれない。

(足手まといだ……っ)

スナイパー装備で出撃したバナラは、主兵装である大型電磁狙撃銃(サンダー・ボルト)を失った今、予備兵装のハンドガンしか持っていない。この状態で多数を相手に白兵戦をやるのは分が悪すぎる。そもそも狙撃のための装備であって、この状況が想定外なのだ。

「……っ！」

迫る鎌が死神のそれに見える。相手が黒尽くめで頭巾を被っていたら尚更だ。ハンドガンで応戦するが、やはり『ウィッチ』も深追いはしてこない。バナラを仕留める気がないのではなく、クラウの気を散らせるのが目的だろう。散漫にでもバナラを狙う事で、クラウの足枷としている。

「クラウ！ 私の事はいいですから！」

「駄目だよ！ 絶対に駄目……！」

全身甲冑――『ナイト』の唐竹割りを躲し、『サムライ』の大型剣を両手の爪で弾き、『ウィッチ』が投擲した氷塊を射出した光の刃で相殺しつつ、クラウは譲らない。彼女だけなら脱出するなり、一人ずつ各個撃破も可能はずだが、ロクに武装がない今のバナラを底いながらでは、思うように戦えないのだ。

「ぐっ……」

同時に三人の攻撃に晒されているクラウを援護しようとする、四人目の『ファイター』が立ちはたかる。一切の飛び道具を持たず、手甲と脚甲による格闘戦はシンプルだが、それ故に隙がない。特に今のバナラはハンドガンしかないため、懐に飛び込まれれば為す術がない。

「……」

銃口を向ける。抜き撃ちには自信があつたが、『ファイター』は引鉄を引く直前に銃身を手甲で外に払う。バナラは払われた勢いのまま一回転し、改めて照準。だが、やはり払われる。後退しつつ銃口を向けるが距離を詰められ、また発射直前に銃身を払いのけられる。

こんな光景を観た事がある。ガンアクションの参考に観た映画で、拳銃を使った超近接戦闘をやっていた。憧れて練習をしたが、やりたかったのはヤラレ役ではない。

「……っ！」

『ファイター』の動きが変わった。もう見切った——という事か、ハンドガンの銃身を左手で掴み、僅かに姿勢を下げ、右手を握り込んで脇を締めた。

(右ストレート……!?)

敵の狙いは判る——だが、避けられない。

『ファイター』の拳が腹に決まり、吹き飛ばされて何かの建物に叩き付けられた。その際に看板や電柱を巻きこんだ気がしたが、よく判らない。クラウが何か言っている。よく聞こえない。不思議と痛みは感じない。早く立ち上がらないといけない。動けない。

「……………」

視界に広がる状況は最悪と言つていい。少し先では、超巨大な二足歩行の怪物を相手に、異形の〈機獣少女〉が戦っている。荷電粒子砲の発射まで動かないと思われていた〈ヘルイン〉は活動を再開し、この作戦の要である〈フェンサー〉は〈ブラストホールスピアE XII〉をすでに失っていた。

〈BO作戦〉は事実上、失敗したのだ。

それでもアエラ・カートライトは〈フェンサー〉を操り、〈ルイン〉に攻撃をしかけているが、その強大な火器を以てしても通用しない。だからこそ重装甲で覆われていない背中を狙う『一点突破』が採られたのだ。無論、アエラもそれを理解しており、ヘルインの背後に回ろうとしているのだが、その高さまで上昇しようとすると直掩の『プター』に迎撃されてしまっている。

『武士』『魔法使い』『騎士』『闘士』、そして飛行タイプの『猛禽』。

五人は〈ステインガー〉との遅滞作戦で命を散らせた〈機獣少女〉であり、バナラにとつては直接の後輩に当たる。それが先の〈ヒナミ総力戦〉でサクヤヒメに使役され、同僚であるライカ・ユズキは、バナラを含む仲間を逃がすため一人残って戦った。彼女の消息は不明だが、五人が健在という事は……。

「……………」

眼前に立ち、無言で此方を見下ろす『ファイター』——本名はコハク。彼女等は事務所に入ったばかりの新人で、何らか訓練を一緒にしたが、個人的な付き合いはない。ライカは人当たりの良い性格もあって、それなりに打ち解けていたようだが。(作戦が失敗なら、これで終わっても同じか……)

まるで意思が感じられない無表情のまま、コハクがすつと右腕を真横に伸ばす。拳を握り込み、すつと脇を締める。

綺麗な動きだ。演武のような魅せるアクションこそ、彼女等が所属する〈FA…Gエンタテインメント〉の真骨頂。無意識だからこそ、身体がそういう風に動いてしまうのだろう。恐らくは他の四人も。

「……っ!?」

コハクの右ストレートが動けないバナラに放たれる寸前、両者の間に割り込むように、直上から地面にめり込むものがあつた。何者かが投擲した槍、それは——

〈ベリルランスII〉……!?」

斧槍に近いI型と違い、純粋に槍としての取り回しを重視した、バナラの専用装備である。

(何処から……いや、誰が——?)

違う。今やるべきは考える事ではない。

(動け。手を伸ばせ。そして——戦え!)

両肩に装備した攪乱用の閃光発音弾をすべて射出。一瞬で辺りが閃光と爆音に包まれる。対策を取っていないければ〈機獣少女〉といえど常態を保つのは不可能だ。バナラはなんとか立ち上がり、アスファルトで舗装された地面に深々と突き刺さった〈ベリルランスII〉を引き抜く。

「——MBデバイスを破壊しろ!」

投げかけられた聞き覚えのある声に従い、バナラは目と耳を奪われ立ち尽くすコハクの、胸部にあるアンテナ状のパーツに得物を突き立てた。機獣のコアの欠片が納められたMBデバイスは、MBジャケット展開時、手持ちの武器となる場合が多いが、〈FA…Gエンタテインメント〉で採用されているのは内蔵式がほとんどである。

貫通はさせていない。だが、コハクはビクンと身体を震わせると、まるで電源が落ちたかのように地に伏した。

死んだ——という表現は正しくない。コハクも、他の四人も、遅滞作戦ですでに死んでいる。遺体は連れ帰ってやれなかったが、それは共に生き残ったライカも確認している。

これで本当に『終わらせて』やれたのだろうか。

頭を切り替える。今は感傷に浸ってられない。まずはクラウの援護だ。

アエラも心配だが、あの声が『彼女』ならば任せて大丈夫だろう。

ここ一番で駆け付け窮地を救ってくれる——まったく、腹が立つくらいイケメンだ。そんな状況でないと判っていても、バナラは笑みを浮かべずにはいられなかった。



規格外のMBジャケットである〈フェンサー〉を操り、戦場と化した市街地をアエラは駆ける。敵は全高約六十メートルの超巨大な機獣〈ルイン〉。

正直、勝てる気がしない。

巨大機獣との戦い方——当然だが〈機獣少女〉の教本にそんな項目はない。

それを今日が初陣のアエラに、しかも初めて実戦で使う装備でやれというのは、あまりに酷だ。確かに、〈ルイン〉が自衛のため活動を再開する可能性は考慮していた。だが、荷電粒子砲の発射までエネルギーを温存するため、迎撃は取り巻きに任せ、自身は動かない可能性が拳がっていれば、そうあってほしいと願うのが人情だろう。

幸い、動き出した〈ルイン〉は荷電粒子砲を使っていないが、各部に装備したレーザーと巨体そのものが、〈機獣少女〉にとっては充分に脅威だ。

しかも〈ルイン〉には直掩がある。飛行型の〈機獣少女〉——名前はウルラだったか。航空機を思わせる白い装甲のMBジャケットを身に着け、〈ルイン〉の頭上を旋回し、此方が接近すると迎撃してくる。

〈フェンサー〉は所詮、陸戦兵器。推進装置を利用して高高度まで跳躍したり、短時間の滞空は出来ても、自由に飛び回ったりは出来ない。ウルラがいる限り、頭を押さえられるのも同然である。

そして、〈フェンサー〉を作戰の要たらしめていた〈ブラストホールスピアEXⅡ〉はすでない。此方の狙いを読んだのだろう。真つ先に狙われ、ウルラによって本体と繋がる保持腕を破壊されてしまい、喪失してしまった。この状況の中、搜索は困難と言える。

〈BO作戦〉は事実上、失敗している。

だが、撤退は出来ない——意味がない。すでに肉眼では捉えられないが、上昇中の巨大な『輪』が衛星軌道に到達すれば、〈ルイン〉の荷電粒子砲が人類の生存圏を焼き尽くす。タイムリミット制限時間は残り二時間を切っている。今、此処で、〈ルイン〉をなんとかするしかない。

散乱する瓦礫を乗り越え、降り注ぐレーザーの雨を掻き潜り、迫る尻尾をスライディングで躲し、〈ルイン〉の背後へ移動。主推進装置を全開にし、一気に上昇。背中の荷電粒

子供給フアンを視界に収める。

(来た！)

直掩のウルラだ。獲物を見つけ、頭上から急降下して来る姿は鳥の猛禽類を彷彿とさせる。

右肩の散弾迫撃砲を上空に構え、このために温存しておいた最後の一発を撃つ。一瞬で広範囲に炸裂弾が放たれ、弾幕を形成する。ウルラは咄嗟に脚部の推進装置で急制動、そのまま逆噴射で離脱したが、この場を凌げれば充分だ。

空中で左右の側部推進装置を使い姿勢制御。もう一度主推進装置を吹かし、荷電粒子子供フアン目掛けて加速する。

(これならば——ッ！)

折り畳まれた左肩のバトルカノン砲を展開。強烈な反動と引き換えに、長射程と高火力を誇る重火砲である。さすがに砲身を突き入れた上での零距离ならば効果はあるはず。確実に自分も巻き込まれるが、これしかないならやるだけだ。

荷電粒子子供フアンへの接近に対処するため配置されたレーザー機銃を、グレートシールドMk. IIで受けながら進む。表面が相当な熱を帯びているらしく、何時溶解してもおかしくない。

(——なんだ？)

唐突にレーザーによる迎撃が止まった。接近しすぎたためかとも思ったが、違う。疑問に思った直後、シールドに衝撃が走り、制御を失ったアエラは落下しながら、何が起きたのか理解した。(ルイン)の肩に上った『サムライ』のような機獣少女が、大型剣を投擲したのだ。

長い黒髪をポニーテールにした眼鏡の機獣少女——名前はサヤだったはず。ウルラと同様、すでに命を落とした故人のはずが、なんらかの手段で使役されていると聞いている。

シールドを捨て、側部推進装置で落下速度を殺し、なんとか着地する。

これでも同じ手は通用しないだろう。

「——つく！」

上空からはウルラの銃撃。正面からはサヤがライフル片手に迫ってくる。唯一残っているバトルカノンは、機獣少女のような小回りの利く相手には当たらないだろう。

それでも——

「どうせ散るなら、せめて派手に散ってみせましょう……ッ！」

「——よく言った！」

ハツタリのつもりで啖呵を切ると、相槌のようなタイミングで応える声が響いた。直後、頭上を旋回していたはずのウルラが墜落し、周囲を警戒していたサヤも、糸が切れた操り人形のようにその場で頽れた。

「……………」

咄然とするアエラ。状況に理解が追いつかない。覚悟を決めた途端に敵が倒れたのもあるが、倒れたサヤの向こうで立ち上がる、恐らくは二人を倒したのであろう鎧武者のような機獣少女が、あまりに予想外の人物だったのだ。

「よう、アエラ。それが〈フエンサー〉か？ カッコイイじゃん」

余裕の表れなのか、彼女は自分が消息不明となっていたにも関わらず、昨日も会ったような態度でそう言った。

「——ライカ姉様!?!」

ライカ・ユズキ。

従姉であるバニラ・イカルガの親友で、アエラもよく遊んでもらっている姉のような存在であり、〈機獣少女〉として憧れてもいる。

「よくぞご無事で——」

「おっと」

一瞬で距離を詰められ、抱えられ、浮遊感を覚える。

あまりの衝撃に戦場である事を忘れていた。ウルラとサヤが倒れたため、ヘルインが頭上からレザーを降らせ、油断していたアエラをライカが抱えて離脱してくれたのだ。

「規格外なだけあって、さすがに重いな」

「い、いけません、ライカ姉様！ お姫様抱っこなどと、バニラ姉様に恨まれてしまいません……………」

「黙つてりやバレないさ」

「……………!?!」

片目を閉じ、悪戯っぽい笑みを浮かべ、人差し指を唇にちよんと当てられた。この人は生まれる性別を間違えたのだろう。あまりにイケメンすぎる。

ヘルメットの風防の奥で密かに頬を赤らめ、この事はバニラには黙つておこうと決めた。

「よくがんばったな、アエラ。初陣にしちや出来過ぎだ」

「……………ですが、作戦は——」

〈フエンサー〉を〈BO作戦〉の要たらしめていた〈ラストホールスピアEXII〉を失い、〈フエンサー〉自体もボロボロだ。加えてアエラの機力も心許ない。

「いや、まだ切り札はある」

「……?」

アエラを抱きかかえたまま、追撃してくる（ルイン）を首だけで振り返り、ライカは不敵な笑みを浮かべた。



黒い全身甲冑の（機獣少女——キニスの銃撃を、クラウはその高出力故の浮遊機能と推進装置で、滑るように回避する。弾速は速くないが、機力で編まれた弾体は大きく、一発が重い。

（弾丸じゃない。矢みたいだ……）

より大型化した（ザンバー・クロウ）から形成される機力の剣を、投げナイフのように射出して応戦する。一本が直撃し、キニスはボウガンのような形状の銃を捨て、腰の後ろから下げていた幅広の剣を引き抜き——投擲した。

「——っ!」

片手で易々と扱える大きさではない。重量もかなりあるはずだ。そんなものが空気を切り裂き飛来する衝撃度は半端ではない。咄嗟に地面を蹴って跳躍。眼下を通過する瞬間、その重量と速さが持つエネルギーに冷や汗が出た。おかしな表現になるが、あんなもので斬られれば挽肉にされるだろう。

羽根と尻尾で姿勢を制御し、失速する事なく突入コースを変更。両手の

爪に再び機力の剣を生成し、斬りかかる。キニスはもう一本の剣を背後から抜き、応じる。

（今のは様子見……?）

すれ違いざま、キニスは斬撃を受けるだけだった。

先の幅広の剣に比べれば細いが、それでも一般的な剣と比べれば十分に大きく長い、片刃がごっそり欠けた大剣。それを捨てると、ずっと地に突き刺していた二本目の剣を抜き、キニスは構えた。両足を大きく開き、右足は後ろに引き、大剣を肩に担ぐように載せ、無手の左腕は正面に垂らし、腰は落とし気味の独特の構え。

（カウンター狙い? 応じる義理なんてないけど……）

このまま頭上を旋回して（ブラズマ・スマッシュヤー）で狙い撃ちにしてもいい。あの最も物騒な大剣を相手に、律儀に接近戦に付き合う必要などない。

（……でも、それじゃあ彼女の魂が浮かばれない）



バナラから少し話を聞いただけで、キニスとは何の面識もない。それでもこうして同じ「機獣少女」として対峙してみても、彼女が何を望んでいるのか、少しだけ感じた。ならばそれに応えてやりたい。

「いいよ——全力でやろう！」

「——」

仮面に隠れてキニスの表情は見えないが、それが頷くように僅かに上下して見えたのは、クラウの思い込みだっただろうか。

地表すれすれを直進するクラウ。待ち受けるキニス。

正面切つての真つ向勝負。

すれ違う一瞬に起きた攻防の詳細は、当事者だけが胸に刻めばいい。

振り返り、倒れたキニスの横顔を見下ろす。仮面が砕け、露になった少女の素顔は儂げで、先ほどまで全身甲冑で大剣を軽々と構えていたなどは、実際に戦ったクラウですら信じられない。

「……………」

キニスの身体を起こし、バナラに言われた通り仮面の額部分を破壊する。此処にM B デバイスが収納されており、こうしなければ何度でも立ち上がるらしい。

「終わったようですね」

「バナラ……うん」

魔法使いのような出で立ちの「機獣少女」——イルマだったか——を肩に担いだバナラを見て、彼女も無事に勝つたのだと理解する。先ほどはハンドガン一丁で劣勢だったが、適切な装備さえあればやはりバナラは強いのだと、右手に持ったベリルランスII 槍を見て思った。

「あとは「ルイン」だけど……バナラ？」

「……何かが来ます」

遙か上空を見上げ目を凝らすバナラに気付き、クラウもその視線の先を見つめる。

鳥ではない。航空機でもない。

あれは——



地下。

未だ幼体の視覚を通じて「機獣少女」達の足掻きを見ていたサクヤヒメは、面白そうに感嘆の声を漏らした。

「――ほうっ、考えたな」

遙か上空から（ルイン）を目指して降下する飛翔体。

それは飛行型の（機獣少女）だった。



高高度からオオミヤ・シティ上空に急降下する（機獣少女）が二人。

珍しい飛行型MBデバイス持ちである。

『――いいいやっほおおおおおおおおおおおおおおおおおッ!!』

通信機から聞こえるロゼ・レオーネのハイテンションな絶叫に、ヴィオレ・モンター

ニユは盛大に嘆息した。

思えば、彼女との付き合いがケチのつき始めだった。空を飛ぶ事が馬鹿みたいに好きなロゼに付き合わされ、何時の間にもやら飛行禁止空域侵入の常習犯となり、

（機獣少女）協会から目をつけられるようになった。

だが、悪い事ばかりでもない。

二週間ほど前には、やはり進入禁止とされている封鎖区域の上空を飛行中、窮地に陥っていた（獅子王）アイナ・ボークマンと（竜帝）ルイゼ・ルンシュテッドを救助した。

一週間ほど前にもロゼが行くと言って聞かず、ヒナミ・シティで行われた（ステインガ

ー）殲滅作戦に遅れて駆け付けた際、たった一人で大立ち回りを演じていたライカ・ユズキを救出した。

そして今は、オオミヤ・シティに現れた超巨大な機獣（ルイン）を殲滅するための切り札にされている。

そう、悪い事ばかりでは――

「……この作戦が終わったらコンビ解消するから」

『――えっ!? なんだよ急に!?!』

通信機越しにロゼが驚く声が聞こえる。まるで思い当たる節がないようだ。もっとも、それも致し方ない。ロゼは迷惑をかけている自覚がまるでなく、ヴィオレもなんだかんだで彼女に振り回されるのを楽しんでいる。こんなやり取りも何十回と繰り返しているのだ。

「今回は本気だから!」

『判った。これが終わったら、きちんと話し合おう。そういう訳だから――』

「ええ、絶対に成功させるわよ」

『そういう事!』

攻撃目標を視界に捉え、ロゼがターボブースト機能を使い加速、先行する。

（ルイン）の背中にある荷電粒子供給ファン。装甲で覆われていない其処は、考え得る限り唯一の弱点と言えるだろう。それをピンポイントで狙うのは戦術として正しい。だが、陸戦兵器である（フェンサー）と、限られた戦力でそれを為すのは困難と言わざるを得ない。

そこで飛行型の〈機獣少女〉に白羽の矢が立った。〈BO作戦〉に関するロゼット・コードルの動画を観た専門家達が、大急ぎで武器を考案し、ギリギリで完成させたという訳だ。そしてロゼが立候補し、ヴィオレはそれに付き合わされた。

（ライカは間に合ったのかしら……）

救出したライカは一刻を争う状態だったため、ヴィオレ達の住む街の病院に搬送し、治療をしていた。まだ全快とは言いがたい状態だったが、オオミヤ・シティに行くと言うので、病院を抜け出す手伝いをしたのもヴィオレとロゼだ。

（他人の心配してる場合じゃないか——）

ロゼとタイミングをずらし、ヴィオレもターボブースト機能を作動させる。普段から加重がかかる曲芸飛行はやっているが、それでもこの加速はつらい。

先行したロゼが攻撃態勢に入る。この速度なら発見された頃には切り札の射程に入れる。迎撃は不可能なはずだった。

だが——

「そんな……」

ロゼの攻撃は失敗した。用意された〈嵐の刃〉——希少金属リーオで作られた三本の刃を撃ち出す発射装置は、しかし到達前にレーザー機銃によって迎撃されてしまった。

奇襲に気付かれていたと思えない。発射後に迎撃では間に合わないのだ。つまり、

（ルイン）はヴィオレ達の存在に気付いていて、〈嵐の刃〉発射前にはレーザーを撃っていた事になる。恐らく、ロゼよりほんの少し速く、コンマ一桁レベルの差で。

（化物め……）

まずは背中中のレーザー機銃を無力化せねば話にならない。ロゼが退避するのを確認し、ターボブーストを解除。ヴィオレも空域を一時離脱した。



〈L. C. ファクトリー〉地下施設。

有線ケーブルによって得られた地上の様子を画面越しに見守っていたロゼットを始め

とする所員達は、飛行型〈機獣少女〉二名が離脱するのを見て、落胆の表情を浮かべていた。

〈フエンサー〉に続き、空からの奇襲も失敗。〈BO作戦〉に便乗してくれる者達が現れてくれたのは嬉しいが、その分、残念な結果となると気落ちも大きくなる。

「なんだ、あれ……?」

所員の一人が、地上に設置したカメラの一つから送られた映像を見て、疑問の声を上げた。

「新手の機獣でしょうか?」

件くだんのカメラからの映像を主画面メインモニターに切り替え、補佐をしてくれているシオリ・ユウキが言った。

「そうみたいけど……」

現在、〈ルイン〉の他に二体の機獣の存在が新たに報告されているが、そのどれも一致しない。狼オオカミに見える黒い機獣だ。

「速いですね。このまま進むと中心街です」

指示するまでもなく、シオリはカメラを切り替え、中心街の様子が再び映し出される。

復興のための予算や対応を考える人達からすれば、いつそ人類滅亡を願っても仕方ないと思える惨状である。其処そこに佇たたずむ〈ルイン〉の禍々まがまがしくも巨大な姿は、まさに創世神話に語られる『ハメツノマジユウ』そのものだ。

「……来た」

黒いオオカミ型の機獣がカメラの画角に入る。それは一切の躊躇ちゅうちよなく〈ルイン〉と戦闘に入り、その光景はロゼットを含む全員を唾然あぜんとさせた。これが機獣同士の戦いで、普通の事なのか、その判断が出来る者はこの場にいない。

「あれ、ツバキ……?」

遠距離からの映像なため小さくて気付かなかったが、オオカミ型の機獣に取り付いていたらしい。ツバキ・タカチホらしき〈機獣少女〉は、オオカミ型から離れると、〈ルイン〉の胸部内に侵入したようだ。

異変はすぐに始まった。

〈ルイン〉が不快な咆哮を上げ、脱力したように動きを止めた。

続けて、不可解な感覚に襲われた。ロゼットだけではないようで、誰もが困惑気味に顔を見合わせているが、表現する言葉を持ち合わせていない。

そして――

「――やみ子ちゃん……?」

〈ヒナミ総力戦〉にて消息不明となった〈機獣少女〉の流遠<sup>るとお</sup>やみひめが、ツバキと共に姿を見せた。まるで〈ルイン〉の中に捕らわれていた彼女を、ツバキが救い出したようにロゼットには見えた。



〈ヤミヒメ〉の操縦席<sup>コックピット</sup>。

アサトから〈ヤミヒメ〉を引き継いだアヤカは、〈ルイン〉の胸部から出てきたやみひめとツバキの姿を認め、胸をなでおろした。

「ここまでは順調ね」

「はい、アヤカ」

複座の前と後ろの席に座ったアヤカと紅桜<sup>べにお</sup>は、そう言葉を交わした。

つづく

## あとがき

どうも、流遠亜沙です。

『ゾイヤミ』第四十二話をお届け致します。

今年最後となります。最後だからここまでは書きたい、あのキャラも出したいと欲張った結果、三十ページ超えました。

この半年くらは本当に書いてる期間、しんどくて、やめたくありません。義務じゃないし、罰則もない訳ですから。

でも完成すると達成感がマジパナイ。読み返すと「超面白い！」と自画自賛（自分が面白いと思うものを書いているので当然）。なんだかんだで続けられています。

ちなみに、今回のお気に入りには25ページの、アイナが無言でリツに『<sup>かが</sup>屈め』と催促するシーンです。

良きところで謝辞を。

まずは今回もチェックをしていただいている紙白さんに感謝を。キャラもネタも盛大に使わせていただいております。是非、サイトの『展示スペース』で元ネタ作品と参照しつつお楽しみください。

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。感想はなくても構わないので、続きが読みたいと思っただけならアンケートにご協力ください。

今年もお付き合いいただき、ありがとうございました。

来年には完結させます！

2019 / 12 / 29 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXX 第3部』小説ページに戻る